

LIVE: かぼちゃ商会 1996.6.26 渋谷クロコダイル

かぼちゃ商会は、去年の暮れにチンドン屋で観たことがあるだけだったが、それがよくてライブが楽しかった。音楽性は豊かなのだけれど、全体的にいままだ決して上手ではないのに（でもこれからどんどん上手になると確信している）とても純粋で、観客を楽しませようということがよく伝わってきて、楽しく、あたたかく、すばらしいライブだった。

ヴァイオリン、ギター、スティール・パンの人たちがゲストで出て、それもとてもよかった。

私にとって、かぼちゃ商会の一番の魅力は田ノ岡三郎のアコーディオンである。聴いていると、美しさと哀しさがなまぜになって涙がでてる。

岩原智のベースと、丸山知文のサクソ（フルート、ピッコロも演奏する）はとても上手くて力強い。

かぼちゃ商会はチンドン屋だから「チンドン、チンドン」というチンドンがもちろんはっている。そのチンソンを受け持っている長岡純子と大太鼓の黒田牧子が何曲か歌を歌って、上手いとはとてもいえないけれど、いい感じだった。リーダーの新名健二（ギターなど）の司会ぶりも好感がもてた。



黒田牧子 (太鼓)

岩原智 (ベース、パーカッション)

新名健二 (ギター)

田ノ岡三郎 (アコーディオン、キーボード)

長岡純子 (歌手)

丸山知文 (サクソ、フルート、ピッコロ)

6月26日 のときは海野知子とゲスト：山下浩 寺中名人 原田芳宏 (ライブ)



大部分はカバーだったが、オリジナル（作曲は岩原智）も何曲かやって、それがとくに心にひびいてきた。どちらもアレンジがすばらしいと思った。

おしゃれなコスチュームもかぼちゃ商会の魅力のひとつ。

ライブの3日後、かぼちゃ商会のチンドン屋ライブが新宿のハイジアというところであった。ステージでやるのところが、練り歩きながら演奏するので、後をついていきながら聴くというのも、ちょっと気恥ずかしいけれど、なかなか楽しいもの。

LIVE: RED CREAM JUICE 1996.6.27 原宿ルイード

RED CREAM JUICE



レツドクリームジュース だぜ マア! マア! マア!

RED CREAM JUICEには、「フェイク」という言葉がびっぴりあてはまる。

「フェイク」といっても、RED CREAM JUICEの場合は、ブランド品の偽物とか、フェイク・ファーとかをいうときに使うような、本物にたいしての偽物、ということでもないし、「虎の威を借る狐」のような意味での偽物ということでもない。

「羊の皮をかぶった狼」といったら、ちょっとおかしいけれど、本当は中身は本物なのに、偽物のふりをしているという洒落た「フェイク」なのである。

その偽物のふりをしている「フェイク」にうっかりだまされると、中身の本物が気がつかないで RED CREAM JUICEは、ふざけたおもしろいバンドという受け止め方をしてしまう。たとえば、Mr.Childrenの桜井和寿が、「びあ」のインタビューで、「今「愛がすべてなんだよ」って歌っても何のリアリティーもないわけで」といって、「「愛は消えたりしない 愛に勝るものはない」なんて流行歌の戦略か?」

と歌うのを聴くのと（本当にそう感じているのかとか、歌詞が聞きとりやすいとかは、ここではあえて問題にしないことにして）、RED CREAM JUICEの大坪サチオが、「わざとらしい歌です」といって、「どこにいてもこの俺がきみを守ってあげる」と歌うのを聴くのと（RED CREAM JUICEの方が演奏も歌もくらべものにならないくらいすばらしいということは、ここではあえて問題にしないことにして）、どっちが楽しい? どっちが独特? どっちが鋭い? 私は、本物のつもりになっている人間より、偽物のふりをしている人間のほうが断然好きだな。

6月27日の RED CREAM JUICEのライブはこの「フェイク」がビシバシ決まっていた、そこらにとびつた私の脳ミソが、RED CREAM JUICE モードに再構成されてまた頭の中にもどったみたいだった。ライブが終わったあとは、日常性にもどるのがいやなのではなく、もうすこしこの楽しい非日常性に別れを惜しんでいたいという思いにつつまれていた。

頭の中でなら、一兆の人間を殺したって、それは想像。わかりやしないんだ。

ボクにはこう聞こえるんだから仕方ない。

「ラヂオスターの悲劇」は、分裂した精神を持つリスナーに殺された女子大生DJの物語なのだ。ボクには聞こえる。まだ深夜放送が若者の「かか込み寺」であったころに起こった、ミスDJの悲劇をバグルスは、トレバーホーンはテクノにのせて唄っていたに違いない。

「フォーリンエンジェル」は、ビュアな心を持つ少年が絵を描きながらやばり分業ぎみの男に殺された歌なのだ。ボクにはそう聞こえる。

そして「サタデーナイトフィーバー」こそ、その加害者である分業男が、ジョントラボルタの名のもとに、土曜の夜、頭の上に銀のボールを回転させて人を殺しにゆく、その門出を祝して、ピーシーズの三人がハイトーンで喜びを歌うソングなのだ。

絶対そんなことないだろうけれど、ボクにはそういうふうに聞こえるのだから仕方ない。

（ロック・オリジナル映画「僕には聞こえる」所収）

ESSAY 大槻ケンヂ 「これは良いことだと思っ」

日本語以外に言葉を知らないボクのような者が外国のロックを聞く時、訳詞カードでもない限り、アーティストが一体何を歌っているのか理解するのは至難の技なのだ。歌い方や、その人のルックスなどから判断するしかないのだが、それにしただってひどい勘がいをすることもある。

キッスの初期のナンバーに「ゴインブラインド」という曲がある。ジョンシモンズのしわがれ声の切々と悲しい大バードで、ボクはこの曲がとても大好きだった。キスはオドロドロしいメイク（今はしてないけど）とは裏腹に、長いツアーで家に残してきたワイフへの愛を、やさしく歌ったたりする軟弱野郎なのだ。きつとこの「ゴインブラインド」も、その手の定番ラブソングだろうとボクは思っていたのだが、ある日訳詞カードを見てぶつたまげてしまった。

60歳のジーン様が、16歳の娘に恋をして、「わしゃあ愛の盲目なんじゃあ」と自己批判しているという、とんでもない歌だったのだ。

そんなのメロディーだけ聞いてちゃわかんないもんなあ。

冒頭に書いた「スーグラ節」じゃないけれど、ボクは実は、ものすごい誤解をしてロックを聞いているのかも知れない。

もしかしたら、パプールの「チャイルドインタイム」は、「通リゃんせ募金に協力しよう」と訴えている詞なのかも知れない。

プリンスの「パプーレン」は「やっぱ銭湯がいいよね」という歌なのかも知れない。ケイトブッシュの「パプーシカ」は「あーん勝新ってイカスウ、一度モミモミされたわいりん♡」などということを知っている歌なのかも知れない。

絶対にそんなこととはないだろうけど、何たって英語わかんないだもん。逆に言えば、わからないからどんな解釈だってできてしまうわけだ。

これは良いことだと思っ。

限定されることのない歌のイメージはどんな方向へでも縦横無尽である。自由なのだ。というわけで、

今回の訳詞は、まったくの意識だ。「フォーリンエンジェル」「ラヂオスターの悲劇」についてはそのタイトルだけで、そして「サタデーナイトフィーバー」は、同名の映画におけるジョン・トラボルタのヘンテコだけを素に書いてしまった。

きつと作詞者が知ったら、怒髪天をつくが、あきれてシラけてしまうような意識だと自分でも思っ。

でも

でも

ボクにはこう聞こえるんだから仕方ない。

「ラヂオスターの悲劇」は、分裂した精神を持つリスナーに殺された女子大生DJの物語なのだ。ボクには聞こえる。まだ深夜放送が若者の「かか込み寺」であったころに起こった、ミスDJの悲劇をバグルスは、トレバーホーンはテクノにのせて唄っていたに違いない。

「フォーリンエンジェル」は、ビュアな心を持つ少年が絵を描きながらやばり分業ぎみの男に殺された歌なのだ。ボクにはそう聞こえる。

そして「サタデーナイトフィーバー」こそ、その加害者である分業男が、ジョントラボルタの名のもとに、土曜の夜、頭の上に銀のボールを回転させて人を殺しにゆく、その門出を祝して、ピーシーズの三人がハイトーンで喜びを歌うソングなのだ。

絶対そんなことないだろうけれど、ボクにはそういうふうに聞こえるのだから仕方ない。